

いきいき農林水産業者

部門	氏名（住所）	受賞理由
園芸	<p>あだち ひでき 足立 秀樹 ま ゆ み 真由美</p> <p>（琴浦町 太一垣）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 栽培品種と作型を分散し、梨大規模経営を実現。 ジョイント栽培のモデル園を引き受け、高い栽培技術と収益性を展示し、他の模範となるとともに、県内外の視察を積極的に受入れ、ジョイント栽培の普及に取り組む。 地元の船上小学校の生徒に梨園、ジョイント栽培について知ってもらうことが大事と考え、生徒の梨栽培体験に取り組む（R2～R3年）。 町内でいち早くジョイント栽培に先進的に取り組み、夫妻で協力し、栽培技術を模索しながら取り組んできた。ジョイント栽培コンクール最優秀賞を受賞するなど、ジョイント栽培の地域の見本となり、町内外の他産地からの視察を積極的に受入れ、ジョイント栽培の普及に貢献している。
園芸	<p>かやの よう 榎野 洋</p> <p>（南部町境）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成 24 年に南部町で白ねぎ栽培を開始し、令和元年に規模拡大。排水性が悪いほ場での白ねぎ栽培技術の確立に向けて土壌改良や排水対策を行いながら所得目標の達成に取り組む。 令和元年から、南部町の指導農業士を任命され、若手生産者の技術支援を行う。 南部町白ねぎ部会の副会長として、部会活動にも積極的に参加し、会議や講習会等で建設的な提案を行う。 現在も自身の経営面積を拡大しており、作業受託により近隣農家の排水対策も実施。今後は後継者育成や従業員確保、新規品目の導入等に取り組みながら経営発展と地域貢献の両立を図る。
農産	<p>くにおか さとし 國岡 智志 ゆかり 由香里</p> <p>（智頭町 大字坂原）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 水稲、ドウダンツツジ、ブルーベリー、アスパラガスを栽培する智志氏の実父母のもとで、平成 27 年に家族経営協定を締結し、農業経営に取り組む。令和元年以降は主として経営を担う。 主に水稲の栽培に注力し、販売先の多様なニーズに対応するため、コシヒカリ、ひとめぼれ、星空舞等、多品種の栽培を行う。 規模拡大とともに販売先の確保にも積極的に取り組み、鳥取市内だけでなく京阪神や関東方面などでも多くの固定客を獲得。 遊休化が危ぶまれる農地を積極的に借り受け、耕作放棄地の発生を防ぎ、智頭町の美しい田園風景を守りたいとの強い思いを持って農業に取り組む。 「智頭米」としてブランド化、経営農地の 4 割で鳥取県の特別栽培農産物の認証を受ける米を栽培するなど、地域農業のさらなる発展を目指し、日々実践。

部門	氏名（住所）	受賞理由
園芸	株式会社 <small>あんどあぐり</small> andAgri 代表取締役 <small>はやしぼら まさゆき</small> 林原 正之 （大山町南）	<ul style="list-style-type: none"> 平成 28 年に親元就農。経営継承に伴い、令和元年に法人化を行う。遊休農地やリタイアする生産者のほ場を借り受けることで栽培面積を拡大、法人設立当初の耕作面積目標を 3 ヶ年で達成。現在も農地を借りながら、JA 鳥取西部ブロッコリー生産部役員（検査部長）としても活動を行う。 令和元年には部会でも先陣をきって JGAP を取得し、高品質安定生産に向けて取り組みを行う。地域に貢献できる持続可能な経営を目指し、歴史ある大山ブロッコリー産地を後世へつなげることが活動の原点であり、JA 鳥取西部ブロッコリー部会活動、高齢化を背景に離農する生産者からの耕作地の継承、雇用創出、また法人における職場環境づくりに意欲的に取り組む。 生産・出荷の効率化と労働改善を見据えて農業機械や施設整備を進め、規模拡大を遂げる。現在も経営面積が増加しており、生産性向上のための技術情報の収集や検証に取り組み、労働改善や従業員の福利厚生を都度向上させるよう工夫も重ねる。
園芸	<small>まつぼら ゆたか</small> 松原 豊 （北栄町国坂）	<ul style="list-style-type: none"> 令和 2 年に同地区の生産者よりぶどうハウスを受け継ぎ、令和 3 年より北条支所ぶどう生産部に加入。現在は、生産部内の若手生産者組織にも加入し、技術向上を図る。 令和 6 年より生産部の指導部長に就任し、黒系ぶどうの着色向上による盆需要期の出荷率向上やシャインマスカットの高温障害、後継者不足等の産地課題に対し、指導部長として様々な栽培試験や、作業の効率化等の省力化栽培に取り組む。 生産者の高齢化が進み、空きハウスが目立つ産地の中で空きハウス等を有効活用する為の仕組み作りに積極的に取り組んでおり、今後は自らの栽培規模拡大を予定。また、本年から加入した生産部内の若手生産者組織では、若手生産者の栽培技術の向上等の活動で中心的な存在となっており、生産者からの信頼も厚く、今後産地をリードする存在として活躍が囑望される。